



## チェルノブイリは終わらない・・・

＜ナロジチ地区の農産物の放射能測定＞

2月17日、元気に帰国した訪問団が持ち帰ったデータは、実に驚くべきものであった。

右のグラフは、汚染地ナロジチ地区で収穫された農産物(サンプル)の放射能測定値が、許容値を超えた割合を示している。

**放射能による汚染が、いかに長期間にわたり深刻な影響を残すかを、如実に物語るグラフである。**

この手の資料によくありがちな、「5年前までのデータです」というものではない。つい去年までの最新のデータなのである。

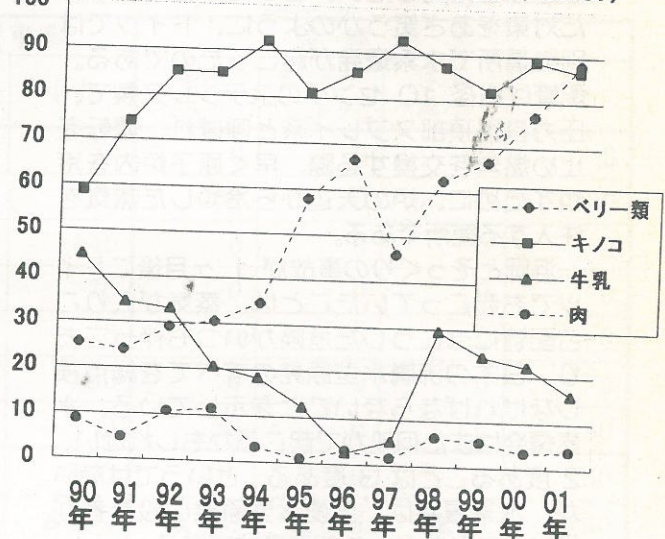
この10年余り、きのこ類については、常に100%近い高率で許容値を超えている。肉・牛乳も、割合は低いものの決してゼロになることはなかった。ベリー類(木イチゴなど)にいたっては、逆に汚染の割合が増え続け、ついに昨年は90%がNGである。**(食べてはいけないのだ!!)**

一方、今回栄養調査を実施した、すべての病院において、ウクライナ政府の示す「栄養摂取量のガイドライン」を、大幅に下回る病院食しか提供できていないこともわかった。

ましてや一般の、特に汚染地域の家庭においては、いったい何を食べればよいというのか・・・。

**「チェルノブイリは終わっていない」---いや、世界に原発のあるかぎり、永遠に続くのである・・・。**

許容値を超えたサンプルの割合(セシウム137)



〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町 137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：大谷早苗

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00~17:00)

E-mail：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp

ホームページ：http://www.chemobyl-chubu-jp.com



2回にわたって連載した浜岡1号原発事故は脱原発に踏み出すチャンスである。これを生かし未来につなげなければ、私達を待っているのは、チェルノブイリの再来である。

### ドイツでも水素爆発

昨年11月に浜岡1号で起こったのと同じ水素爆発による配管破断事故が、1ヵ月後の12月、ドイツのブランスベッテル原発でも起こっていた。中部電力は、水素が溜まり易い場所を「余熱除去系配管の1箇所」だけと決めつけ、「その手前部分にバルブをつけて、水素を含む蒸気が入りこまないようにする」という対策をたて、9月には運転を再開したい、としている。こうした対策をあざ笑うかのように、ドイツでは別の場所で水素爆発が起こったのである。配管は直径10センチのステンレス製で、圧力容器頂部スプレイ系と呼ばれ、運転を止め燃料を交換する際、早く原子炉内を冷やすために、炉の天辺から冷やした蒸気を注入する箇所である。

浜岡とそっくりの事故が1ヶ月後にドイツでも起こっていたことは、蒸気が入りこむ配管にはこうした危険がいつも伴っており、日本の沸騰水型原発のすべてを総点検しなければならぬことを示している。水素爆発はまた何処かで起こるかもしれない。2度あることは3度ある、というではないか。水素爆発は、沸騰水型原発の設計者が思いもつかなかった新型事故である。

### 圧力容器の水漏れは「老朽化」の証拠

これに対し、同じ浜岡1号で7月に起こった圧力容器からの水漏れは「明らかに老朽化」によるものである。厚さ15センチの圧力容器の底部を貫通している制御棒駆動機構の鞘管の付け根に亀裂が入り、炉水が1日当たり80リットル漏れていることに気づかず、7月から5ヶ月間も運転していた。ちなみに、中部電力が昨年8月に定めた「保安規定に定める炉水漏洩量」、即ち原子炉を停止すべき水漏れ量は毎時230リットル(5520リットル/日)である。この程度の水漏れは気にしない、ということであろうか。原発が如何に我々の常識とかけ離れた運転をしているかが分る。しかし、ことは重大である。圧力容器の亀裂は、配

管と違って漏れをとめる緊急停止バルブなどが一切期待できない。亀裂が一気に拡大すれば、手の打ちようがなく直ちに炉心溶融につながる。

### あと1ミリで亀裂が圧力容器貫通・・・

今月(3月)19日、アメリカの原子力規制委員会NRCは、「オハイオ州のデービスベッセ原発(加圧水型)の圧力容器頂部の制御棒駆動機構の鞘管付け根に、長さ18センチの亀裂が入り、厚さ15センチの圧力容器が貫通するまであと1ミリしか残っていなかった」と発表した。反応を制御するために、炉水に溶かしてあるホウ酸が、腐食の原因らしい。NRCは国内の加圧水型原発すべての緊急点検を命じた。

### 迫り来る老朽化事故

#### ・脱原発が緊急の課題

浜岡1号は1976年の運転開始から26年になる。上記アメリカのデービスベッセ原発は1978年(同24年)、ドイツのブランスベッテル原発は1977年が運転開始(同25年)である。何れも約30年といわれる原発の寿命に、後1歩であり、老朽化事故は今後増えると覚悟しなければならない。分厚い(15~20センチ)の圧力容器に貫通する制御棒駆動機構や中性子測定器案内管などの溶接部分は、頑丈な圧力容器のアキレス腱である。中性子の照射を受け劣化する圧力容器の溶接箇所には、時間が経てば経つほど応力腐食割れなどによる亀裂や破断の危険が大きくなる。

### 浜岡1、2号運転再開中止の裁判

東海地震を前に、浜岡1号と構造が同じ2号の運転停止を求める裁判がまもなく静岡で始まる。老朽化と設計ミスによる大事故を避けるためである。全国で1000名の原告を募集中。誰でも原告になれる。参加費用は年間3000円。問い合わせは、「とめよう裁判の会」(連絡先:T/F 054-653-2775)まで。(河田)



## 新年度の事業と予算が決まりました

3月16日の運営委員会と理事会で、02年度の事業と予算がほぼ決まりました。今後、01年度決算確定などにもなう微調整を経て、5月の理事会で最終決定され、6月総会に報告されます。主な内容はつぎのとおりです。

収入は、個人および団体からの寄付、ボランティア貯金交付金、外務省補助金などで1,745万円を見込んでいます。今年度比184万円減です。この数年、不況・事故の記憶の風化などにより寄付の減少が続いています。新年度は、助成金・補助金の募集などに積極的に応募するなどして、収入減を最小限に食い止めるつもりです。

海外事業では、**医療機関支援事業は、540万円で、今年度比109万円減です。**病院別の内訳はつぎのとおりです。

(単位:万円)

	医療機関支援事業			保健事業			
	医療機器	医薬品	小計	粉ミルク	特殊粉ミルク	保養事業	小計
州立小児病院	60	70	130	0	0	0	0
市立小児病院	0	0	0	200	0	0	200
ブルシロフ病院	0	140	140	0	0	0	0
ナロジチ病院	0	70	70	0	0	0	0
移住者診療所	0	20	20	0	0	0	0
修理・メンテナンス	180	0	180	0	0	0	0
州立孤児院	0	0	0	50	0	0	50
計	240	300	540	250	0	0	250
前年度予算対比	▲153	+44	▲109	▲100	▲100	▲50	▲250

昨年度から取り組み始めた**医療機器の修理・メンテナンスの費用**が増え、それ以外が減っています。市立小児病院は、医療機器、医薬品はゼロになりましたが、保健事業で提供される粉ミルクの大半を受け取ります。改築されたブルシロフ病院には、やや多めの医薬品が提供されます。

**保健事業は、今年度比250万円減の250万円。**ウクライナで入手の目途がたったフェニル・アラニンフリーミルクの提供を止め、サナトリウム保養事業も止めます。

そのほかでは、今年度実施できなかった特別事業1,000万円が計上されています。本号P10の記事にもありますように、「1,000万円規模の事業をこなすことができる受け入れ体制がない」という結論になるかも知れません。小口に分けることも検討することになりそうです。

国内事業については、ウクライナからの招聘のような特別企画は予定していません。事業費は120万円。ほとんどは「ポーシェ」の発行・配布費用です。

このように非常にきびしい予算になっています。経費節減に努めるとともに、無償譲渡された中古医療機器の提供や修理・メンテナンスなどのコストパフォーマンスの高い事業を拡充して、実質的な支援レベルの維持・向上を図っていくつもりです。

(田中)



## 新年度の事業と予算が決まりました

3月16日の運営委員会と理事会で、02年度の事業と予算がほぼ決まりました。今後、01年度決算確定などともなう微調整を経て、5月の理事会で最終決定され、6月総会に報告されます。主な内容はつぎのとおりです。

収入は、個人および団体からの寄付、ボランティア貯金交付金、外務省補助金などで1,745万円を見込んでいます。今年度比184万円減です。この数年、不況・事故の記憶の風化などにより寄付の減少が続いています。新年度は、助成金・補助金の募集などに積極的に応募するなどして、収入減を最小限に食い止めるつもりです。

海外事業では、医療機関支援事業は、540万円で、今年度比109万円減です。病院別の内訳はつぎのとおりです。

(単位:万円)

	医療機関支援事業			保健事業			
	医療機器	医薬品	小計	粉ミルク	特殊粉ミルク	保養事業	小計
州立小児病院	60	70	130	0	0	0	0
市立小児病院	0	0	0	200	0	0	200
ブルシロフ病院	0	140	140	0	0	0	0
ナロジチ病院	0	70	70	0	0	0	0
移住者診療所	0	20	20	0	0	0	0
修理・メンテナンス	180	0	180	0	0	0	0
州立孤児院	0	0	0	50	0	0	50
計	240	300	540	250	0	0	250
前年度予算対比	▲153	+44	▲109	▲100	▲100	▲50	▲250

昨年度から取り組み始めた医療機器の修理・メンテナンスの費用が増え、それ以外が減っています。市立小児病院は、医療機器、医薬品はゼロになりましたが、保健事業で提供される粉ミルクの大半を受け取ります。改築されたブルシロフ病院には、やや多めの医薬品が提供されます。

保健事業は、今年度比250万円減の250万円。ウクライナで入手の目途がたったフェニル・アラニンフリーミルクの提供を止め、サナトリウム保養事業も止めます。

そのほかでは、今年度実施できなかった特別事業1,000万円が計上されています。本号P10の記事にもありますように、「1,000万円規模の事業をこなすことができる受け入れ体制がない」という結論になるかも知れません。小口に分けることも検討することになりそうです。

国内事業については、ウクライナからの招聘のような特別企画は予定していません。事業費は120万円。ほとんどは「ポレーシェ」の発行・配布費用です。

このように非常にきびしい予算になっています。経費節減に努めるとともに、無償譲渡された中古医療機器の提供や修理・メンテナンスなどのコストパフォーマンスの高い事業を拡充して、実質的な支援レベルの維持・向上を図っていくつもりです。

(田中)



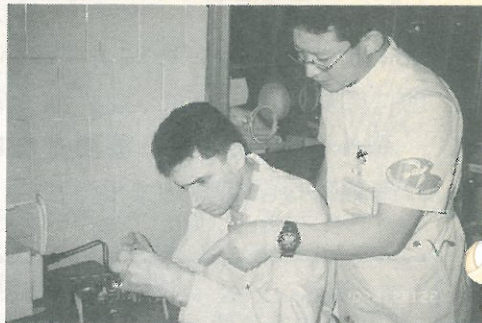
# 特集!! '02年 2月 ウクライナ視察団 報告

「医療支援活動」

臨床工学技士：北野 達也

- ① 現地において臨床工学技士等の医療技術専門職養成
- ② 寄贈医療機器、昨年船送の中古医療機器の稼働状況、所在確認、点検・消耗部品交換
- ③ 院内講義「医用安全管理学」「呼吸療法全般（実技含む）」その他の医療技術移転
- ④ 医科技術専門学校講座開設のための具体案提示（現地の要望次第）
- ⑤ 寄贈以外の要修理機器調査・メンテナンスおよび診療材料・消耗品等の継続供給
- ⑥ 現地医療施設の問題と今後の課題

医療支援の目的は以上のように盛りたくさんであるが、特に今回は、人材育成に重点を置き、養成対象者アンドレイ氏（ジトーミル州立小児病院准医師として勤務するかたわら、ジトーミル技術工科大学医療機器操作技術科にて勉学中！）に対し、実地研修および医療技術移転を行なうことを第一目的とした。



## <活動報告>

### ジトーミル州立小児病院

医療機器の稼働状況調査および修理：小児用人工呼吸器1台修理・保育器3台修理・パルスオキシメータ2台修理・麻酔器1台修理（いずれもマンツーマンで指導しながら実施）

アンドレイ氏技術指導：座学・医療機器取扱い説明・医療機器基板回路図解釈・テスターおよび心電図チェッカー使用方法説明・工具取扱い説明・半田ごて使用法等

血液腫瘍部門状況調査：白血病患児の今後の治療方針についてチュムトDrと意見交換。

寄贈医療機器：中古パルスオキシメータ2台・鼓膜体温計1台・電子血圧計1台・酸素濃度計2台・心電計チェッカー・新生児排痰用バイブレータ3台

### ジトーミル市立小児病院

医療機器の稼働状況調査および修理：内視鏡光源装置1台修理・パルスオキシメータ1台修理・カウンターショック1台修理（アンドレイ氏技術指導）

院内講義：呼吸療法および気管支喘息重積発作対処法講義・医療機器操作説明。

（医師・看護師等40名以上参加で大盛況であった。）テキスト配布。

寄贈医療機器：中古パルスオキシメータ1台・鼓膜体温計1台・小児排痰用バイブレータ1台。

### ブルシロフ地区病院

医療機器の稼働状況調査および修理：心電計2台修理・寄贈パルスオキシメータ取扱い操作説明

アンドレイ氏技術指導：心電計チェッカー使用方法説明・医療機器安全管理学の講義を実践した。

## <今後の課題>

- ① 今後もアンドレイ氏に対し、継続的な技術指導・養成が必要であると考えられた。
- ② ジトーミル技術工科大学医療機器操作技術科（5年制）では5年間座学のみで実習は行われておらず、また、実習を行うための医療機器すらない現状であることがわかった。  
⇒中古医療機器の寄贈・実技講座開設・カリキュラム変更など提案し、将来、臨床工学技士等の高度医療専門職を育てていきたい。（自立支援の為の人材育成事業）
- ③ ジトーミル市立小児病院での院内講義は、呼吸療法・医療機器操作方法についてであったが、40名以上の参加があり、資料の追加を求める看護師もいた。新生児・幼児・小児の「体位排痰法」、また、人工呼吸器などの医療機器を必要としない「気管支喘息重積発作対処法」は、彼らにとっても興味深いものであり有益であった。今後も継続的に実施する必要性を感じた。（患児救急救命の医療技術移転）

近年、外務省・総務省郵政事業庁においては、補助金・交付金の縮小を余儀なくされており、限られた財源の中で、新規医療機器（高額）を購入するのではなく、現場のニーズに答えるべく、医療



機器の絶対数の確保を目指し、日本国内の医療施設で更新のため廃棄処分となった中古医療機器を修理・点検の後、使用可能状態にし寄贈するとともに、定期交換部品・消耗品・診療材料の継続供給をする方が有益であると考えた。数少ない予算でいかに支援し続けるかが重要で、そのためには、現地においても我々のような臨床工学技士などの人材育成が必要であると考えます。“釣った魚を与えるのではなく、釣り針だけを与える…”このことは自国にて自立させるための基本であり、人材育成自立支援事業と考えたい。これらのことは、押し付けであってはならず、あくまでも現地のニーズに応じていく必要がある。

## 拝啓 北野 様 …アンドレイ・ポスタヴェンスキー氏からの手紙…

私は、医療専門学校「准医師コース」を卒業し、州立小児病院に就職しました。その後、診断機器（心電計と脳波計）の使用訓練講習を1ヶ月受け、これらの機器を用いる許可をもらいました。つまり、医療専門学校の勉強だけでは、機器を使いこなすことができません。しかも、卒業したあとに行う医療現場での使用訓練講習は、公式に認められているわけです。

医療機器のある職場で、取り扱いを学び、試験に合格し、初めて使用許可が出されます。私が大学で修得する知識は、純粋に理論的なもので、実際の機器修理についての授業はありません。実習の授業は個々の部品の作動についてであり、機器全体に関するものではありません。大学にある機器は、非常に古く、たいてい故障しているのだから、知識と現実が隔離しています。

故障している機器を見て、原因を想像することしかできないのなら、そんな知識が何の役に立つでしょう？ 正確な診断を下したり、修繕をしたりすることもできません。大学の授業や実習では、多くの時間・労力・お金が費やされるのに、そういったシチュエーションが、モデル化されていないのですから！ 実に残念なことです。

北野さん、お仕事の実践面についても、ぜひ教えていただきたいと思います。理論は、実習なしでは価値がありません。北野さんが実践で習得された、貴重な経験は、私にとって必須の経験となります。お力を借りて、身につけられればと願っています。お忙しいにもかかわらず、ご自分の豊かな経験の一部を私に伝えようとしていただいたことに、前もってお礼申し上げます。実り豊かな協力が実現しますよう心より願っています。

敬具 2002年2月5日

## はじめてのウクライナ

（臨床工学技士：塩野谷幸映）

今回、初めてウクライナの地を訪問しました。

訪問する前は、ウクライナという国は遠く、どういうところかもわからず、またチェルノブイリの事故などは、私にとってニュースに関心を持たない子どもの頃に起きた事でした。そんな状態で訪れてしまったため、広い国土・言葉の違い・経済状態の違いなどに、戸惑ってしまうことがたくさんありましたが、その中でも人々の生活は普通に続いており、出会う人たちの明るい笑顔に、もっと深く考えていた私は救われました。

私は、医療機器のメンテナンスの作業に同行し、州立と市立の小児病院を中心に視察したのですが、この国の医療体制の中で、最善の治療がなされ、そして国の将来を担う多くの子ども達の命が救われることを心から望みました。そのためには、医療機器の絶対数の不足や故障などの改善は、不可欠なものだと実感しました。ましてやちょっとした医療機器の故障などで、命が失われてしまうということは、医療水準にかかわらず絶対にあってはならないことです。市立小児病院には非常勤ですがメンテナンスの技士がいました。最新の医療機器（もちろん提供できればそれにこしたことはないですが）でなくても、そのような技士がどの病院にもいれば、ちょっとした機器の不備にも対応でき、救命率も上がるのだから、技術提供はもちろんのこと、そのようなことが理解されるための教育の提供も必要なことだと感じました。

現地の方々と直接話す機会は、ほとんどなかったのですが、ウクライナ・ジトーミルの文化など学びつつ、特別でなく「この私にできることとは何なのか」を考えていきたいと思えます。





## 「栄養調査」

看護婦：神野美知江

期間：2002年 2月8日～17日

(ウクライナに滞在したのは5日間)

### 訪問医療施設：

- 2月10日(日) ブルシロフ地区病院
- 2月11日(月) デネシ・サナトリウム
- 2月12日(火) ナロジチ地区病院
- 2月13日(水) 州立小児病院

**目的：**食事と発病の因果関係を調査し、新たな支援の可能性を見つける。

現地の被災者や医師たちは、罹病率が高いのは「貧困によって、十分な食材が確保できず、栄養バランスが悪いために発病しやすいのも、原因の一つである。」と考えている。そこで、事故前後の食習慣や食材に関する聞き取り調査を行ない、疾患との関連を知る手がかりとする。

### 調査報告：

最初に、ウクライナ国の財政事情と医療システムについて、簡単に説明する。

ソ連時代、ウクライナでは医療と教育に関しては無料だった。しかし、独立後、国の財政は次第に困窮し、そのサービスはなくなった。ところが国民は、無料制度に慣れていたのでその改定になじめず、働いても給料は何ヶ月も遅配であったり、所得税や物価ばかりが高くなり、生活はどんどん貧しくなっていた。毎日の生活は、自給自足をして維持するだけでもたいへんだった。そして、家族の中に一人でも病人が出ると、治療に必要な医薬品や包帯・ガーゼなどは、物価に比べはるかに高く、少ない生活費から支払うのは、とても困難になった。

また、日本の約3倍の国土を持つウクライナでは、「首都キエフに良い病院がある。」とわかっていても、遠くて緊急時には間に合わない。例えば、発熱すると居住地域にある診療所に行き、診察を受ける。「診療所」では、ほとんどが准医師と看護婦数名で構成されている。診察の結果、入院治療が必要と判断されると、所轄の地区病院への受診を勧められる。「地区病院」で、より専門的な、例えば悪性腫瘍などと診断されると、州立の専門病院への入院となる。そして、大人は「成人病院」へ、子どもは「小児病院」へ入院することになる。州立小児病院に「小児血液腫瘍専門病棟」や、「新生児緊急医療センター」という専門的な病棟が設置されているのは、そのような理由による。

「デネシ・サナトリウム」は、収容人数 600 人の巨大な保養施設で、体質改善と体力増進・リハビリテーションを行なっている。

事故直後に被曝した人から生まれた二世や、汚染地域に住んでいた、汚染した食物を食べ内部被曝をした子どもなどが通う地区では、地区行政の判断で、食事療法と理学療法代金を含んだサナトリウム利用券・保養券が交付される。サナトリウムは、被災者が居住する各州の行政が負担した予算を使っ

て食材を確保し、栄養を考慮した献立(保健省規定の15種類)を提供することができる。

「ブルシロフ地区病院」は、「強制移住区域」からの移住者が数多く住む地区にある。移住者達は、再就職もままならず、わずかな被災者



＜栄養士と面談(ナロジチ地区病院)＞



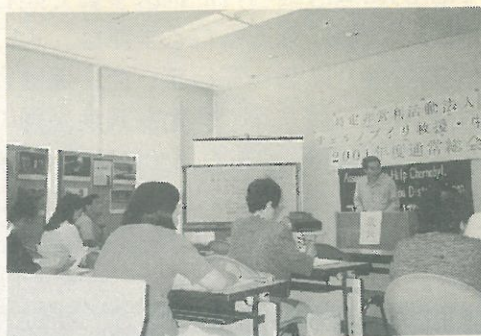


# チェルQデー開催

月日の経つのは早いもので、今年も総会の季節が近づいてきました。織姫と彦星のごとく、一年に一度、会員の皆様に再会できる場として、「楽しくてためになる総会」にし、一人でも多くの方に出席していただくことを目指しています。

そこで、今年のチェルQデーは、「ウクライナ講座」とドッキングして開催します。講座の内容は、総会対策プロジェクトチーム(??)を組んで、総会にふさわしい内容を検討中ですので、ご期待ください。

総会とあわせて、この一年の活動内容や、1000万円プロジェクトの新たな展開、そして今後のチェルQの方向性など、支援して下さる皆様とともに考えたいと思います。日程は6月15日(土)午後1時30分より、場所は5月末発行の「ポレシエ(69号)」にてお知らせいたします(詳細は事務局にお問い合わせください)。



▲昨年の総会のひとこま▼



## アネグートなひととき

### ◆景気問題

ウクライナ政府の記者会見が行われ、記者団が今年の経済見通しをたずねた。政府の担当者は答えた。

「まあまあ景気だ。去年よりは悪いが、来年よりは良い。」

### ◆ジトーミルでの男2人の会話

A:「肉が市場で売り出されたので、今から買いに行くけど、君も行くかい?」

B:「よし、一緒に行こう。」

<Aがキエフ行きのバスに乗ろうとするので…>

B:「おい、なんでキエフに行くんだ? ジトーミルの市場で売っているんだろ?」

A:「行列の最後尾がキエフなんだ。」



## 第3期 “ウクライナ講座・2002” 始まりました!

### 第1回『2月ウクライナ訪問団報告会』(2002.2.23 於:名古屋市教育館)

#### ●「ウクライナの栄養調査」報告(神野美知江さん)

ジトーミル州立小児病院・ブルシロフ地区病院・デネシサナトリウム・ナロジチ地区病院における、栄養士さんの聞き取り調査は初の試みで、ウクライナの食料事情の一端がよく伺えました。(P6~P7 参照)

#### ●「医療機器のメンテナンス・医療工学技師養成」(北野達也さん)

北野さんによる3度目の医療機器メンテナンスの成果と問題点が浮きぼりにされ、これからの現地での工学技師養成の課題と期待が報告されました。(P4~P5 参照)

#### ●「1000万円プロジェクト デネシサナトリウム養鶏場建設計画の検証」

(原富男さん・佐保克彦さん)

これについては、日本とウクライナの計画の立て方・センスの違いが運営委員会でも議論となり、結局プロジェクトそのものが振り出しにもどることになりました。やはり、書面での計画だけでなく、現地での視察、現地の人との話し合いが重要であると再認識されました。(P10 参照)

### 第2回『ウクライナからのお客様』開催のお知らせ

- ・ 日時:4月13日(土)14:00~16:30
- ・ 場所:名古屋市女性会館(地下鉄東別院下車、徒歩5分)
- ・ 参加費:500円

ウクライナから、日本に観光旅行に来ているイリーナ・ペトリチェンコさんと彼女のお母さんのラリーサさんをゲストに迎えます。名古屋大学に留学していたイリーナさんは、救援・中部ウクライナ駐在員の竹内高明さんの言語大学の教え子であり、スタディ・ツアーでは現地で通訳もしてもらったりと、私達の親しい友人です。彼女の日本語通訳で、ラリーサさんに「ウクライナ文化におけるシンボル」、イリーナさんに「ウクライナのコスチューム」というタイトルで、ウクライナの興味深い話をしていただく予定です。ぜひ美人母娘に会いに来てください。(K)



〈スタ・ツアーの応援に来てくれたイリーナさん(中央)〉



## 1,000万円プロジェクト（養鶏場施設）調査報告

南箕輪村 原 富男

今回の2月訪問団の一員として、私達（佐保・原）は、寄付金1,000万円の有効な使い道を探るため、現地調査を担当しました。1,000万円プロジェクトとして、いくつかの案の中から浮かび上がってきていた、「デネシ・サナトリウム付属養鶏場」の可能性を探るための話し合い、および現地養鶏場の視察が主な仕事です。

2月10日、私達はデネシサナトリウム所長のトルスターノフ氏と話し合いましたが、私達はこの養鶏場計画について、実はいくつかの疑問を持っていました。

それは、提案された計画が、①飼育方法 ②販売先 ③設備など、私達が日本の養鶏場で事前に調査した必須事項を充分満たしていなかったからです。

結論を言えば、今回の計画は「所長が、養鶏経験者を加えずに立案した、実現不可能なプラン」であることが判明しました。

翌日には、ソロトビンという養鶏場見学に行ったのですが、現地の連絡の不備で見学自体ができなかったばかりか、ソロトビン養鶏場の責任者からも、「設備や飼育にかかる金額の見積もりが甘く実現不可能」と指摘されました。残念ながら、旧養豚場の建物を修理し、5,000羽の鶏を飼い、「デネシ・サナトリウムの保養者に、汚染されていない卵と肉を提供しよう」とした養鶏場計画は、ここに頓挫しました。

計画が実施できないことは残念ですが、調査段階で実施できないことが判明したことは幸いだったかもしれません。

一方、ジトミルのウズラの卵と肉を生産している業者（ニコライさん）からは、施設の拡充のために出資してくれるならば、利益の15%を救援のために提供するという話が出ていたため、興味を持って飼育場の見学に行きました。ウクライナではウズラの卵は、宇宙飛行士や飛行機のパイロット以外は食べられなかったというほどに貴重で、現在ウクライナには飼育場が3カ所しかないということでした。ニコライさんは、自然エネルギーにも関心があり、自分の養鶏場に、メタンガス・風力発電を導入したいそうです。これらは直接1,000万円プロジェクトの対象とはなりませんが、自力で煉瓦を一つずつ積んで飼育場を作っている姿や、考え方・積極性には感銘を受け、他の形で支援できないものかと考えています。

1,000万円プロジェクトについては、現在、ウクライナ側から「州立小児病院内に、



<ニコライさんのウズラ飼育場>

血液病センターを造る費用の一部に使いたい」という案が、新たに出されています。また1,000万円を一括で使う方法が本当によいのだろうか、そもそも「自立的な活動への援助」という位置付けをしてきたけれども、「ウクライナに日本の市民運動的な発想はないのではないか」など、もう一度、考え方・使い方をしっかり話し合いたいと思います。



## 竹内さんのウクライナ便り

チェルノブイリ救援・中部 キエフ駐在 竹内高明

- ・ 2月16日、フメリニツキー原発で、原子炉と浄水システムをつなぐパイプから放射性を帯びた水が洩れているのが発見され、数時間後水洩れは止められたが、約30平方メートルの水たまりができ、240マイクロレントゲン/時の放射線が測定された。放射線の影響を受けた作業員はいない。ここ数年来、ウクライナの原発で放射性物質の漏れる事故はなかった。  
(『キエフ・ポスト』2月21日号)
- ・ 日本はウクライナに対し、経済リサーチと財政改革推進のため40万ドルの資金提供を表明。  
(同上)
- ・ 2月6日付けの国連レポートによれば、チェルノブイリ事故による放射線の影響で、これまでに少なくとも8,000人が死亡、約2,000人が甲状腺ガンの診断を受けた。甲状腺ガンは、今後10年間に8,000~10,000件の発生が見込まれている。汚染地域の住民総数は20万人。ロシア・ベラルーシ・ウクライナで、450万人が国の補償を受けている。過去10年間で、ベラルーシは被災者支援に10億ドルを費やし、ウクライナは昨年中に1億ドルを費やした。同レポートは、この状況を改善するために、汚染地域で中小企業を育成。農業を復興するという「新しいアプローチ」を提唱している。
- ・ 国家統計委員会によれば、2001年度のインフレ率は6.1%、2002年の1~2月で消費者価格は0.4%下落したという。  
(『キエフ・ポスト』3月7日号)



私の今いるアパートは「私有財産化」されており、家主の母親の名義になっているのですが、誰もそこに住所登録をしていないため、私が外国人登録をしようとすると、「私有財産化」についての書類のコピーが要るんだそうです。で、それをくれるように説得を続けていたのですが、2ヵ月経ってついに断られました。法的な問題というより、家主の母親が、ほとんど本能的な恐怖で反対しているようです。それで私は別のアパートを捜さなければならなくなりました。一応9日までに見つけて引っ越したいのですが、見つからない場合はもう少し長引くかもしれません。実際、老人の法的無知につけこんでアパートの名義を変更してしまうなどの犯罪例を新聞で見たことがあり、「法にのっとり、自らの権利を守る」という経験に乏しい（役人の恣意と専横にふりまわされる経験に富んだ）この人たちの不安は、私にも一応わかります。しかしその結果、自分がめんどろな目にあうのは困ったものですが、仕方がありません。

日中の気温は10℃くらい、最高会議選挙を2週間後に控えて、ビラまきなど選挙活動がさかんです。「どの党に投票するか」という世論調査の結果公表は、すでに禁止（中止？）されました。

3月18日



## 事務局だより

**その1**…3月16日に、待望のコピー機が事務所へ運ばれた。

私がウクライナから帰国して間もなく、事務所のコピー機が天寿をまっとうしたのだ。それから2週間、新品購入を検討したり、ツテをたどって探した挙句、伊那の原さんを通じ、中古のコピー機を安く手に入れることができた。おりしも、外務省への報告書作成真っ最中のこと、運営委員会準備も重なり不便の上なかった。

今日初めて使った、新「中古コピー機」の使い心地は抜群。とにかく速い！ こんなものが6万円で手に入るなんて!! やっぱり持つべきは人脈？

実は、今年に入ってウクライナ訪問に関する業務に追われ、本来の会計業務が遅れ気味。これでまた一つ、言い訳の種が消えた…。

そのウクライナ訪問。訪問団としての報告は別紙に譲るとして、自分としては初の海外渡航。しかも、初の長期旅行(いえいえお仕事です)。たくさんの人にお世話になった。いろいろな旅行グッズを貸してくれたお知り合いの方、同行した原さん・神野さん・北野さん・塩野谷さんは言うまでもなく、現地の竹内さん・キリちゃん…。皆さん、本当にありがとう。(写真、もうちょっと待ってね)

行ってきて一番感じたのは、「やっぱり人助けは難しい」という事。もちろん、誰でも気軽に参加できる人助け・ボランティアもあるけれど、「人助け」が行われる現場・中枢に入って、本当に相手の為になることを継続するというのは生半可な技量や情熱ではやれないと身にしみて感じた。

そういう意味でも、私のような未熟な者を派遣団に加えてくれたチェルQ(運営委員はもとより会員の皆様)に感謝したいし、これからどれだけ自分を磨くことができるか、大きな課題だと思う。(佐保)

**その2**…3月24日、名古屋空港より「超音波診断装置1台」「心電計1台と記録紙」「心電計・パルスオキシメーター・保育器の補修部品」等が現地へ飛び立ちました。行き先は、州立小児病院・市立小児病院・ブルシロフ病院等です。

これは、P4～P5の北野さんの報告にもありますように、「限られた財源の中で現地のニーズに応えるべく、日本国内の医療施設で更新のため廃棄処分となった中古医療機器を、修理・点検して使用可能状態にし寄贈する」活動の実践です。今回の機器は、北野さんの働きかけで「大阪府三島救命救急センター」よりご寄付頂きました。

今後とも、中古医療機器のご寄付を募り、6月頃に(今度は船便で)、車椅子・病院用ベッド・自転車等とともに現地へ贈りたいと考えています。「まだまだ、コンテナに余裕あり！」皆様のご協力をお願いいたします。(山盛)

## 編集後記

☆春なのに新しい旅立ちの春なのに難題が次々。お祓いに替えて、散る桜花に祈り。(京)

☆よんどころない(非常に私的な)事情で、2つ目の原稿を書いてしまった。さて2つ目はどれ？(佐)

☆食べても食べてもお腹がすく。干し椎茸を入れてあるタッパに虫がわいてた。春が来たなあ。(佳)

☆「幸」という字は「辛」に似ている。今、「辛い」をたくさん経験すると、いつかたくさん「幸せ」になるよ…。

なんだかふつつつと希望がわいてくるような、贈る言葉に感動した。(美)

☆1,000万PJの最有力候補「デネシ養鶏場計画」が白紙に戻った。しかし、チェルQは事前調査にこだわり、納得しなければ決して手を出さない。「宗男ハウス」は、絶対に作らないのだ。(J)

〒456-0003 名古屋市熱田区波寄町20-14

「エープリント」(ポレーシェ印刷)

TEL・FAX (052) 871-9473